



コメント

皇太子妃と哲学者、同時代の「日本人女性」

北村 文

津田塾大学

津田塾大学講師。専門分野は社会学、ジェンダー研究、日本学研究。東京、ホノルル、香港、シンガポールでエスノグラフィー調査を実施。代表的著作は、『日本女性はどこにいるのか: イメージとアイデンティティの政治』(勁草書房、2009年)、日本の日英バイリンガリズムとジェンダーを分析した「English Mystique? A Critical Discourse Analysis on Gendered Bilingualism in Japan」(『Gender and Language』10(1)、2016年)、香港在住日本人家庭の外国人家事労働者雇用を調査した「Hesitant Madams in a Global City: Japanese Expat Wives and their Global Householding in Hong Kong」(『International Journal of Japanese Sociology』25(1)、2016年)、「Gender, Representation and Identity: The Multifold Politics of Japanese Woman Imagery」(『Handbook of Gender in East Asia』所収、2020年)、共編書『現代エスノグラフィー』(新曜社、2013年)。

バーズレイ先生、ブロック先生、素晴らしいご報告をありがとうございました。フィールドワークとインタビューを主な調査手法としている社会学者として、お二人のインター・テクスチュアルな手法による研究について、とても興味深く伺いました。いずれの報告も、多様なテキストを注意深く読み込むことにより、いかに言説構築が私たちの生き方に影響を与えているか、特に、ジェンダーが論点となった時にそうであるかを明らかにしています。正直なところ、客席に座ってディスカッサントがどんなコメントをするかを楽しみに待つ立場でいたかった、という心持でいます。

少し異例なことかもしれませんが、まずは、私自身と私の研究について、過去の失敗経験を交えながらお話いたします。私は、津田塾大学で教えています。女子大学で女子学生だけを相手にジェンダーについて講義することを、とても楽しんでます。女性どうしです話ですので、私の発言を男性がどう解釈するかとか誤解するかという心配をする必要はありません。

数週間前、10日間という長いゴールデンウィークの直前のことです¹。学生たちに、美智子皇后と明仁天皇にご拝謁した時のことを話していました。私はお二人が新婚旅行でハワイを訪問したことを記念して創設された「皇太子明仁親王奨学金」の奨学生でした。皇居のカーペットの厚みや、お茶がおいしかったとか、握手をした美智子皇太子妃の手が柔らかであったなど、昼食後の授業で眠そうにしている学生を刺激しようと考えての、他意のないおしゃべりでした。

話をしながらふと気が付いたのは、もしかしたらこのクラスにいわゆる「在日」の学生がいるかもしれない、ということでした。韓国・朝鮮、中国または台湾にルーツがあり、大日本帝国による植民地支配の時代に、曾祖父母が移住した、または強制連行されたという背景の学生が、いないともかぎりません。彼女がほかの学生と同じように私の話を面白がって聞けたはずがありません。急に緊張を感じ、私の顔からは笑みが消えました。どうしてこんな無神経なことができたのか？私は慌てて、ゴールデンウィークが延長したからと

¹ 2019年5月1日の新天皇即位を祝うため、日本政府は、例年は1週間であるゴールデンウィークを10日間(4月27日から5月6日)に延長することを承認した。

いって喜べない、その背景には日本の帝国主義の暗い歴史があるというのに、目をそむけてしまうようだから、と言い添えてその話を終わりにしました。その時の学生たちの当惑した表情が、いまでも目に焼き付いています。北村先生は、たった今まで楽しそうに自慢話をしていたのに、急に真剣になって、良くわからない難しい言葉をボソボソつぶやいている、と。女子大学で教えるのは、やりがいもあり楽しいことです。でも、学生の全員が同じ背景の出身ではないということを、忘れてはいけません。

このようなきまりの悪さを感じた経験は何度かあります。2000年代の初め、大学院生だった私は、ハワイ大学で学んでいました。私の研究は、ハワイに住む日本女性が、どのように日本女性のステレオタイプに遭遇し、それと折り合いをつけるかというものでした。可能な限り多くの日本女性にインタビューをしたいと考えて、インタビューに応じてくださった方から知人を紹介してもらおう方法で、対象者の数を順調に増やしていきました。Xさんを紹介してもらった時のことです。勧めに従い、親しげな文面のメールを送って、調査に参加していただけないかと依頼しました。返信には、自分はインタビュー対象として相応しくないと書かれていました。私からは、「相応しい」とか「相応しくない」ということはなく、どのようなお話も私にとっては貴重なのですと返信しました。次にXさんから来たのは再度の断りのメールでした。「人には話したくないこともあるんです。あなたのような東大生にはおわかりにならないかもしれませんが」。

当時私は東大のドクター院生でした。そのことは共通の知人から聞いていたのでしょう。この時もまた、大きく動揺しました。私は、私自身がハワイに住む日本女性なのだから、みんな私に気軽にいろいろ話してくれるだろうと、無邪気に思っていたのです。日本女性同士が経験や思いを共有するということに、何の疑問も感じていなかったのです。Xさんのメールが、この思い込みを打ち砕いてくれました。日本女性なら皆同じという訳ではないのです。日本女性というカテゴリーには、社会経済的な多様性や、人種や民族、そしてその他にも、様々な相違が内包されているのです。

以来、私の研究は、「日本女性」を語ることはできない、ということに焦点を当てるようになりました。私はこれを不可能なエスノグラフィと呼んでいます。とはいえ、それでもまだ、お話しした通り、「日本女性」神話にどっぷりつかって、教室の席を埋めているのは皆一様に同じ「日本女性」であると思っている自分に気が付くことがあります。これは、研究上の、そして個人的な、挑戦なのです。

私の専門は歴史や文学ではありませんので、バーズレイ先生とブロック先生のご報告に対するコメントをお二人の専門領域に沿った形ではできませんが、私なりに二つの報告からインスピレーションを得て考えたことをお話ししたいと思います。特に、いわば、美智子皇太子妃とシモーヌ・ド・ボーヴォワールの名声の後ろに見え隠れする、日本女性たちに着目します。

バーズレイ先生とブロック先生の研究を並べてみると、当時の日本の女性たちが、正反対のタイプの二人の女性を称賛していたことに驚かされます。一方では、1950年代の日本の女性たちは、バーズレイ先生が「異性愛規範と多産性、人種的特権性」と表した近代家族にロマンチックな夢を見出し、ご成婚に狂喜しました。その一方で、ほぼ同時に、女性たちは平等と自由を追求して、最も前衛的な「非女らしさ」の象徴のひとり、シモーヌ・ド・ボーヴォワールを崇拝しました。ブロック先生はこう述べています。

両親、教師、1960年代のマスメディアから、ロマンチックラブを追い求めることは奨励されつつも、その向かう先にあるのは結婚と母性だと諭され、日本の女性たちは、制約の多い結婚の慣習の外で堂々と愛とセックスを追求するという考えを、解放と受け止めました。

二つのメディア・センセーションは、考えてみると、はっきりと対照をなしています。

こんな疑問が思い浮かびます。戦後第一世代の日本の女性たちは、美智子皇太子妃のような献身的な妻や母にあこがれていたのでしょうか、それともボーヴォワールの生き方が示す、家父長制度的期待から自由になりたいと思っていたのでしょうか？女性たちは、国家イデオロギーに従いたいと思っていたのでしょうか、それとも抵抗しようと思っていたのでしょうか？

この、どちらでしょうか、という問いの形は、便利な質問形式ではありますが、実はひっかけ問題です。日本女性の中には常に、多様性や差異が存在しているわけですから、女性たちそれぞれが異なる現実を生きていて、異なる崇拜対象がいて、異なる夢を持っているということに、何も不思議はないはずです。

話はもう少し複雑になります。『ハルコの世界』という本を紹介します。ゲイル・バーンスタインによる重要な、1970年代の日本の農村生活のエスノグラフィーです。主な調査対象は、「典型的な日本の農村女性」を自称するハルコです。1974年時点で42歳ですから、バーズレイ先生とブロック先生の報告に登場する女性たちと同世代にあたります。ハルコは家事を引き受けると同時に、家族が営む農業の中心となって、田んぼの管理をし、家族が食べる果物や野菜を育てています。地域内で雑多なパートタイムの仕事を引き受け、村の農家の戸主男性たちと共に村内の集会に参加します。それでも、彼女自身は自分は「主婦」だと考えています。

ハルコの打ち明け話から、さらに複雑な現実が明らかになります。

「できることなら、毎日子どもたちのセーターを編んだり部屋の片づけをして過ごしたい²。」

これについて、バーンスタインは、こう述べます。

日本の農村女性にとって、女性の解放とは(解放という言葉は使わないかもしれないが)経済的不安定と単調でつらい農作業から自由になり、料理や掃除、裁縫にかかる時間を増やし、子どもの宿題を手伝えるようになることなのだ³。

明らかに、ハルコにとって「良妻賢母」はかなわぬ夢なのです。ハルコは、ブルジョワのマイホーム主義を追求することができる境遇の、美智子妃崇拜者とは違っています。また、都会の中流階層で学識があり、マイホーム主義に疑問を持ちそれを否定するというぜいたくが許されている、ボーヴォワール支持者とも違っています。しかし、興味深いことに、ハルコは、男性たちと肩を並べて仕事をし、自立と自由を謳歌することで、ある種の「非女らしさ」的生活を、地方の農村で実現させているのです。そうと考えていなくとも、ボーヴォワール流なのです。

ここでわかってくるのは、戦後女性の、経済、地域、教育面での多様性です。経済的資本そして文化的資本を持つ女性たちは、美智子妃的良妻賢母像をモデルとしました。ボーヴォワールのフェミニズムの熱心な信奉者は、ブロック先生のお話に登場した女性作家たちを含め、恵まれた社会的立場を利用して

² Gail Lee Bernstein, *Haruko's World: A Japanese Farm Woman and Her Community*. (Redwood City, CA: Stanford University Press, 1983), 85～6 頁

³ 同書 168 頁

国家イデオロギーを超えることを目指しました。そして、ハルコのような、そして香川と滋賀の私の祖母たちのような、政府が宣伝し、ボーヴォワールが抵抗した、都会の中流階級的な女らしさとはかけ離れた現実を生きる女性たちがいました。社会経済的な差異、政治イデオロギーの差異、そして分断は、計り知れないほど大きかったのです。

その他にも、「良妻賢母」イメージの影で生きていた、他者化された女性たちをあげてみたいと思います。人種、民族、言語、セクシュアリティ面でマイノリティとなる女性たち、被差別部落の女性たち、障がい者の女性たち。ほかにもまだまだたくさんいます。こうした女性間の多様性や差異については、ウーマンリブ運動や世界的な第二波フェミニズム運動一般においても、見過ごされてしまったと指摘されています。重松セツはこの点について、「日本のフェミニストたちは、ジェンダーにだけ焦点を当て、限定して考えてきた。それこそがエスニシティと階級の特権に他ならない」と指摘しています⁴。「日本女性」というカテゴリー内には、多様性のみならず、権力や階級構造、そして暴力も存在しています。

この様な日本女性間の多様性、一般化不可能性、分類不可能性は、フェミニズムにとって、いまだに争いの種になります。ごく最近のことですが、女子大学がトランスジェンダー学生を受け入れ始めること（お茶の水女子大学の決断がそのきっかけ）について、社会的な議論が巻き起こりました。多くのトランスジェンダーの団体がこれを好意的に受け止めたのに対し（もちろん、過度に一般化してはいけません）、自称「ツイッター・フェミニスト」たちのなかには、躊躇する気持ちを表す人もいました。特に、性暴力反対を強く主張している人たちです。身体的変化の程度がどうあれ、男性の身体（であったもの）が女性にとって安全な空間に侵入することは容認できない、というコメントまで飛び出す事態です。熱い議論は未だに続けられていて、互いへの敵意から暴言が飛び出すこともあります。これはまさに、女性間の暴力といえるでしょう。

女性とは誰のことでしょう？ 日本女性とは誰のことでしょう？ より重要なのは、私たちがごく気楽に女性や日本女性について語るとき、そのカテゴリーには誰が含まれていて、誰が除外されているのかという問いです。二つの研究報告は共に、歴史的視点から、フェミニズムの核心におけるこの問いの重要性に光を当てていると思います。この長く問い続けられている問題について、この機会に議論を交わしたいと思います。

⁴ Setsu Shigematsu, “Rethinking Japanese Feminism and the Lessons of *Ūman Ribū*: Toward a Praxis of Critical Transnational Feminism,” in Julia C. Bullock, Ayako Kano and James Welker eds., *Rethinking Japanese Feminisms* (Honolulu, HI: University of Hawaii Press, 2018), 217 頁。